

経済成長期の ASEAN と国際通貨システム

秋田経済法科大学 西尾 圭一郎

ASEAN 諸国は経済発展の初期段階において、その経済成長の多くを海外資金に負っていた。しかし、経済が発展途上の段階で、なぜそれほど多くの海外資金を取り入れることができたのだろうか。その理由の 1 つには、多国籍企業の進出やそれに伴う銀行の進出といった要因があげられる。多国籍企業や多国籍銀行の存在は、情報の非対称性や信用リスクの問題を大きく緩和する。他にあげられる要因は、香港やシンガポールなどのアジア域内の国際金融市場の発展である。シンガポール国際金融市場とは、通常は ACU 勘定を利用したアジア・ダラー市場を指すが、そのアジア・ダラー市場などの国際金融市場が近隣にあることによって、情報格差の問題は緩和される。ニューヨークにおいて与信調査を行うのと、香港やシンガポールにおいて与信調査を行うのでは、かかるコストは異なる。地域における資金需給や景気判断なども素早く行うことができる。またグローバルな貸し手にとっても、アジア企業に貸し出すのと、アジア企業を顧客に抱える銀行の支店に貸し出すのとでは、リスクが大きく異なる。

同時に資金の流入や流入経路の形成・拡大は多国籍企業の進出やその継続を促す経済成長をもたらす。そして、企業進出・経済成長と資金流入や資金市場の拡大は、相互に影響を与えあう構造を形成する。こうして ASEAN では、1980 年代～1990 年代前半を通じてドル資金の流入とそれを使用する経済システムとが構築されていく。

しかし、アジアにおける金融システムを取り上げている既存研究ではこうした関係を捉えきれておらず、アジア諸国に対する資金フローの拡大やアジア諸国の金融深化などをアジア経済の発展と併せ見る研究に終始していることが多い。従来の研究に欠けていたアジア経済と国際通貨システムとの関係を分析することで今後のアジアの国際通貨システムのあり方を模索するにあたってより望ましい、あるいは実現可能なシステム構築を行うことができるだろう。

そこで本稿では、経済発展期のアジア諸国への資金フロー、とりわけ最も大きな比率を占めていた銀行貸出を通じた資金フローを中心にアジアとドル本位制の関係を分析する。そして、日本・アメリカ→NIEs・ASEAN という流れと、香港、シンガポールを含んだ NIEs→ASEAN という、多経路にわたる資金の流れ、直接投資、貿易構造の変化の 3 つの要因を複合的に分析し、資金－投資－貿易という重層的な結びつきによってアジアが現行の国際通貨システムであるドル本位制へより深く包摂されるようになったという構造について論じる。